ティールーム

雑感

竹森（たけもり）　俊平（しゅんぺい）
（経済学部教授）

5月,6月は締め切りのある原稿を書きすぎた結果，神経性胃炎を患ってしまった。この原稿の依頼のことは忘れようと思っていたが,「死や，税金と同じように，締め切りとはかならず来る（英語の格言）」。ということで，胃に負担とならない，気楽なことを書かせてもらう。

最近の図書館の利用法としては，もっぱら電子媒体を利用している。ウェッブによる論文の検索など便利なものだ。ほとんど，コピー機のご厄介にならないで済む時代になった。新聞の検索も便利で，どんなトピックでも，にわか専門家になれる。新聞の場合，PDFでないテキスト文書だと，そのままコピーして，自分の書く文章に引用することも簡単だ。といって，引用の使い方は注意が必要だ。昔なら，原文を横に並べ，手書きで原稿用紙に写していくのだから，手がくたびれる。手がくたびれるから，それが自然と過剰な引用の歯止めになる。あまり引用が多い文章というのは読みにくいものだ。

しかし，昔の文章家でも，徳富蘇峰などという人の文章はやたらに引用が多い。本一冊の5分の3は引用であろうか。あれは，本人が原文を手書きで写したのか。そうであれば，まさに博覧強記である。さもなければ，書生にでも，写しておけと命令したのか。昔の人で，もう一人，引用が多いのが高橋亀吉である。これは，自分で書き写しているような気がする。引用した文章と，自分の文章とがうまくつながっているからである。そういえば,名文をタイプで打って引用した場合，それがきっかけで自分の文章まで良くなることがある。書き写している間に，その文章のリズム，間合いといったものが，自然に身についてくるのである。反対に，英語の文章を自分で訳して引用した場合には，その後の文章が，がたがたになることが多い。翻訳には気を使っているが，翻訳した文章はどうしても翻訳調になる。そのリズムで日本語を書くから，文章がおかしくなるのである。そうであっても，テキスト・ファイルからコピーして，文章に貼り付けるのよりは,自分で打ったほうが,原稿は書きやすい。コピーした場合には，もとの文章のリズムが身につかないから，自分の文体とのギャップが出てくるのである。何でも，かんでも，科学の進歩が良いとは言えないわけだ。

文明の進歩といえば，最近の学生は電子辞書を使う。あれなども，科学の進歩のマイナス面だろう(少し大げさな話だが)。なぜといって，辞書などというものは，もともと引くべきものではないからだ。分からない単語は，連立方程式の未知数のように，コンテクストから逆に割り出すべきものだ。福澤翁を始めとして，昔の蘭学者が頭脳抜群だったのは,外国語の学習が,同時に連立方程式を解く作業だったからである。

自慢ではないが，昔から，辞書，とくに英和辞典はめったに使わない。連立方程式が好きだからというより，面倒くさいからだ。たしかに，英和辞典を使わないで困ることもある。魚，鳥，花，木などの名前が分からないのである。「民主主義」といった抽象的な言葉ならば，英英辞典を読んで理解することもできよう。むしろ，英英辞典の説明は語義から始まるから，言葉の意味が良く判る。ところが,「菊」だとか,「白樺」だとかいう言葉が出てきて，それを英英辞典の説明から理解するのは大変だ。幸いなことに(？)，自分は日本語でも，花や木の名前をよく知らない。だから，英語の名前が分からなくてもさほど困らない。唯一困るのは，食べることが好きなために，外国に行って魚の名前が分からない時のことだ。そういう時には，まよわず調理場に行く。調理場に行って，この魚だと指す。

ということで，まったく雑駁で，どうでも良いことを書きつらねながら，規定の字数まで辿りついたようだ。結論を述べれば（！),「電脳」と「自分の頭脳」をバランス良く使って，人生を楽しむべきだということである。